



「入院おめでとう」産科だけ

携することもある。

産婦人科を舞台に命の誕生を巡る人間模様を描く人気漫画「コウノドリ」。その主人公のモデルは、りんくう総合医療センター（大阪府泉佐野市）の産婦人科部長、荻田和秀さん（57）だ。漫画では、ジャズピアニ

「コウノドリ」主人公のモデル・産科医
荻田 和秀さん



をれか年合
ん眠を（昨総
ち「声（うで
やにとさんく
赤性に田さん
前にるか田さん
日だます荻田
数産たす荻田
てます荻田
ける荻田
11月、りん
医療セ

高校生でジャズと出合い音楽

家を夢見たが、結局、医学部に

進み父と同じ道を歩んだ。産婦

人科は、救急、

殖医療など様々な要素があり、守備範囲が広い。そこに魅力を感じた。

実際に働き始めると、うつ、育児への強い不安など、女性の心の問題に直面することが少なくないと感じた。背景に孤立や貧困などが潜む場合もある。時として「妊婦とおなかの赤ちゃんのため」に、市役所の子育て支援部門に出向き、連

携することもある。

コロナ禍では多くの感染妊婦を受け入れた。当時、妊娠36週以降で感染すると、帝王切開にする病院が多かった。出産時のいきみに伴う飛沫感染を回避する狙いもあった。荻田さんは「医療者側の都合で帝王切開を選ぶのはおかしい」と、院内感染対策を徹底したうえで帝王切開せずに陣痛を待つて産めるようにした。

この取り組みは「コウノドリ・新型コロナウイルス編」でも描かれている。作者の鈴木木ユウさんは「妊婦や家族に寄り添う優しさを持ちながら、信念を通す強さも併せ持つ荻田先生が大好き」と話す。

地方の産科医不足のニュースを見ると、荻田さんは思う。「入院してくる人におめでとう」って言えるのは産婦人科だけ。命の誕生に立ち会える素晴らしい仕事」と。そして、母子の退院時には「おめでとう」ではなく「頑張りや」と声をかける。

（東礼奈）

らだ。「24時間体制のお産に全ての産科病院が対応するのは難しい。地域の基幹病院への集約化が解決策になりうる」と考えている。

同センターは大阪府南部の周産期医療の拠点で、年間600件以上のお産を扱う。産婦人科救急の対応も多い。救急医とも協力し「どんな妊産婦も断らない」。

一方で、医師の夜間の呼び出しは最小限に抑える。人員と機材が集まる拠点病院なので、産婦人科の当直医を毎晩2人配置できるか

例。「過酷な仕事と違って、世のお父さんはそんなもの」とも考えていた

休みの旅行は父の勤務先近くのホテルに泊まるのが恒例。「過酷な仕事と違って、世のお父さんはそんなもの」とも考えていた

育て支援部門に出向き、連

育て支援部門に出向き、連

育て支援部門に出向き、連

育て支援部門に出向き、連